

今回で三回目となる屋久島。

初めてこの島にやってきたのは、今から三年前のことだった。そのきっかけは、私が通っていた英会話学校の外国人の先生たち。彼ら彼女たちは、限られた時間の日本滞在中に、必ず屋久島に行くのである。

そして行ったことがない私に、「日本人なのに何故行かないの?」と言いつつ。あまりに先生たちが薦めるので(立場が逆)、一度この目で確かめてみようと思ふ屋久島へ。そしてまもなく森のとりこになってしまった。

私の初めての森体験は、屋久島にやってくる観光客のほとんどの目的がそうであるように、縄文杉登山だった。往復十時間の旅。

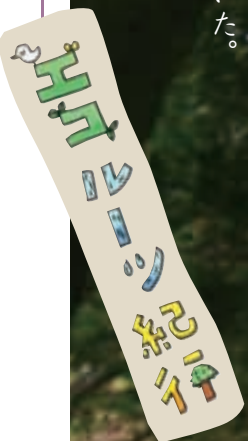
高度を増すに従って姿を現す不思議な面相の屋久杉たち(樹齢千年以上を「屋久杉」と呼ぶ)。住宅地で育った私は、森の中をこんなに長時間歩くのは初めてである。神が棲むと言われる神聖な空気を感じつつ、でもホッとするような、なつかしいキモチがふれてくる。何でだろう?

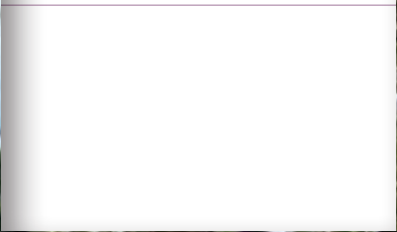
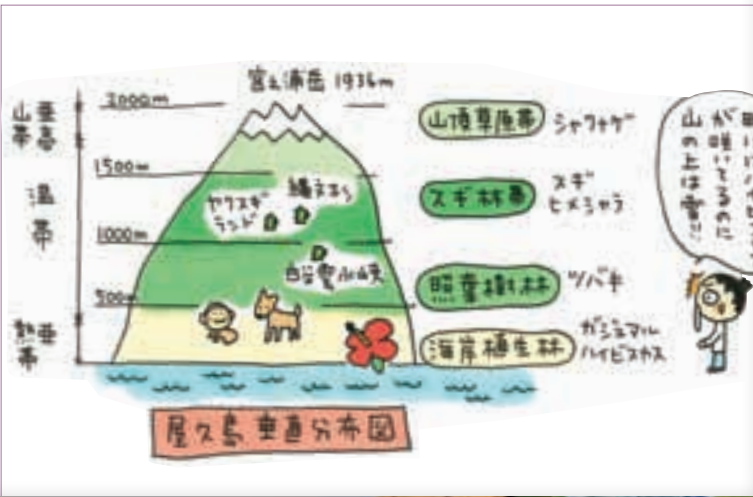
長い行程後に縄文杉(推定樹齢七千二百歳)と出会う。自分よりはるか昔からこの世にいる大先輩を前に、自然と頭が垂れる。と同時に「この自然をこのまま後世の人たちに残したい」と素直に思った。

そしてひとつ気になったこと。登山口から森に足を踏み入れた瞬間から、ずーっとゴミがひとつも落ちていないのだ。この森の自然を守ろうとしている島の人々のガッツを、ひしひしと感じたのである。具体的にどんなことをしているのかな? 興味が湧いた。

地球生態系を守り生かす活動を訪ねて――

世界自然遺産・屋久島に行く





▼樹齢3000年の「紀元杉」。屋久島では樹齢1000年以上のものを「屋久杉」、1000年未満のものは「小杉」と呼んでいる



環境省屋久島世界遺産センター
1993年12月、屋久島の約1/5、107.47km²のエリアが世界自然遺産登録を受けたのを機に、96年4月にオープン。環境省自然保護官事務所を併設し、屋久島の自然の保全・管理や調査・研究の拠点として情報収集・発信を行っている。自然保護官（レンジャー）の松永暁道さん（写真左）が説明してくれた。



垂直分布の生態系

三年前からの願いがかなって、今回の旅で屋久島を守るいろんな立場の人たちに、話をうかがうことができた。この島には自然を守るために国（環境省）、県（鹿児島県）、町（屋久島町）の関係機関がある。

まず国の機関である環境省の屋久島世界遺産センターに行き、自然保護官（レンジャー）の松永暁道さんに話を聞いた。

屋久島が日本で初めて世界遺産リストに自然遺産として登録されたのは、一九九三年のこと。樹齢数千年の屋久杉の原生林が残っていることに加え、島の中で「垂直分布」といわれる亜熱帯植生から亜高山植生までの生態系が見られることが極めて珍しい、ということも評価された。気温は標高が一〇〇メートル上がると〇・六℃下がる。屋久島は面積約五〇〇平方キロメートルの小さな島ながら、九州最高峰一九三六メートルの宮之浦岳をは

じめ一〇〇〇メートル以上の山々が連なる。このため亜熱帯から亜寒帯までの気候を併せ持ち、気候ごとに多様な植生が垂直的に分布しているというのだ。

屋久島に赴任して一年。松永さんは、最低週一回は山に入り、現場を歩き、動植物や施設・利用の状況を自分の目で見て、地域の人々の意見を聴きながら対策を講じるのが仕事だという。但し「僕たちが守るのではなく、あくまでも主役は地域の人々だ」と。

「ごぼうび」としての世界遺産登録

私は世界遺産に登録されたから、屋久島の自然保護が急に進んだと思っていた。でも実はそうではなく、以前から島民たちは自ら行動を起こして森を守っていたのだという。世界遺産登録は、むしろ島民たちの活動の「ごぼうび」だと。そう語るのは、屋久島町環境政策課長の塚田英和さん。

「屋久島の人たちと森のつきあいは、他の地域とちよつと異なるんです」と言葉を重ねる。

時は江戸時代。島津藩に属する屋久島は、年貢米の代わりに杉を建材に加工して納めていた。屋久島は山岳信仰の島。自然に対して畏敬の念を抱きつつも、生活のために同時に伐採も行ってきたのだ。

ところが明治時代の地租改正で、森は国有林となる。島民は当面の税負担は免れたものの、薪をとったり日常生活のために森に入ることすら許されなくなった。国と島





テーマパークのようなネーミングの印象とは異なり、原生林が広がる「ヤクスギランド」。
ネイチャーガイド オフィスマなつの真津昭夫さんと



◀「ネイティブ屋久島人の血は熱い。自分たちが運動して残したものが世界遺産になったという自負がある」と語る屋久島町環境政策課の塚田英和さん



◀大正末期～昭和の高度成長期、伐採の前線基地である小杉谷まで走っていたトロッコ軌道跡



民の闘争の結果、大正時代の一九二一年、一部国有林の島民への返還や保護林指定などを盛り込んだ、通称「屋久島憲法」が発表される。この保護林が世界遺産の中核エリアとなるのは後の話――。

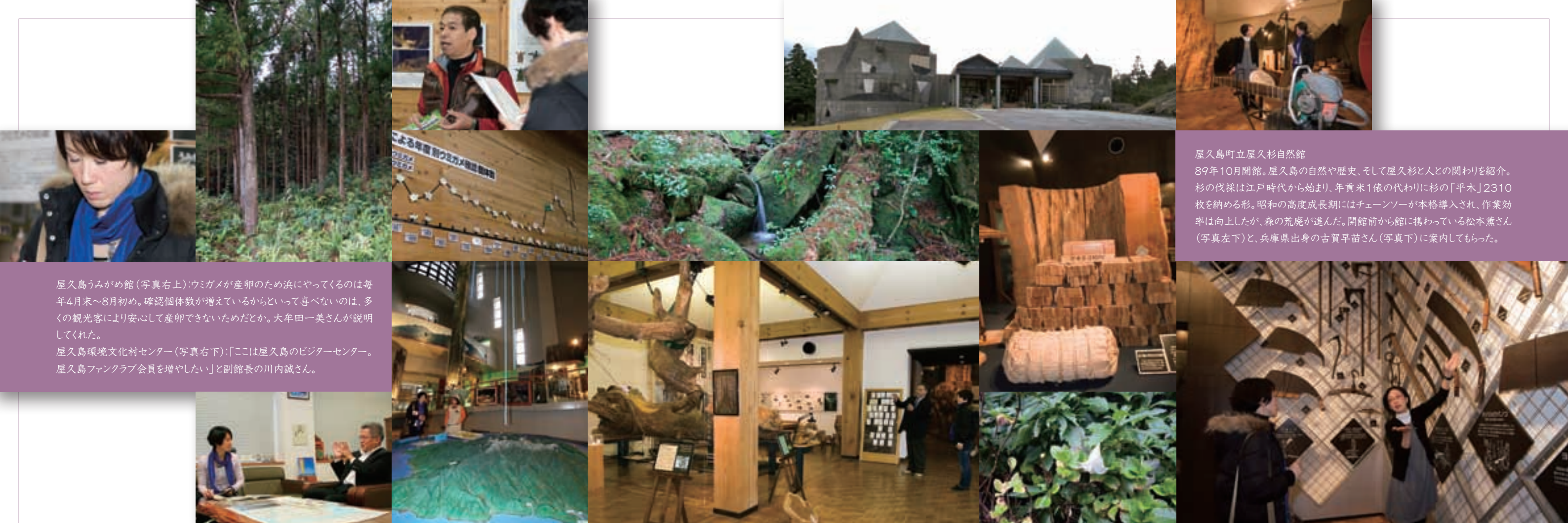
昭和初期から戦後の高度成長期には、木材需要の高まりとともに、国有林の大規模伐採が進む。トロッコ軌道の完成、九州初のチェーンソーの導入などは画期的であり、伐採量も飛躍的に増えていった。

やがて七〇年代、生活が安定してきたのと同時に、森は生産の場だけではない、文化や教育の場でもある、という声が起き始めた。もともと山岳信仰の屋久島だから、自分たちが持っている貴重な環境資産に気づくのに、時間はいくらもなかった。原生林保護運動が高まり、八三年、瀬切川上流域右岸の原生林伐採計画が見直される。島民の活動の成果と言える。

「島民の生活」と「自然保護」と「観光」

八九年に町立の「屋久杉自然館」が開館。九〇年、鹿児島県が屋久島を、自然の恵みについて学べる環境学習フィールドにしようという屋久島環境文化村構想を発表した。そして九三年八月、町は屋久島の貴重な自然を誇りとして、環境整合性の高い豊かな地域づくりを目指した「屋久島憲章」を制定。同年十二月、世界遺産登録。世界的に屋久島が注目されるのである。

「屋久島の歴史は自然保護ではなく、伐採の歴史なん



屋久島町立屋久杉自然館
89年10月開館。屋久島の自然や歴史、そして屋久杉と人との関わりを紹介。杉の伐採は江戸時代から始まり、年貢米1俵の代わりに杉の「平木」2310枚を納める形。昭和の高度成長期にはチェーンソーが本格導入され、作業効率は向上したが、森の荒廃が進んだ。開館前から館に携わっている松本薫さん(写真左下)と、兵庫県出身の古賀早苗さん(写真下)に案内してもらった。

屋久島うみがめ館(写真右上):ウミガメが産卵のため浜にやってくるのは毎年4月末～8月初め。確認個体数が増えているからといって喜べないのは、多くの観光客により安心して産卵できないためだとか。大牟田一美さんが説明してくれた。
屋久島環境文化村センター(写真右下):「ここは屋久島のビジターセンター。屋久島ファンクラブ会員を増やしたい」と副館長の川内誠さん。

バランスとしてのエコツーリズム

です」と潔く語る、屋久杉自然館学芸係長の松本薫さん。なるほど確かに館内には江戸時代から行われて来た伐採の方法や道具が、わかりやすく展示されている。でも同時にそれは人との関わりの歴史でもある。伐採の歴史に触れずに「我々は自然保護をしているんだ!」と大義名分を掲げるよりは、よっぽど説得力がある。

「島民の生活」と「自然保護」のバランスが要求されるのだ。そしてそこにもうひとつ、「観光」という要素も入って来る。

世界遺産登録後、急増する観光客の数。島民一万四千人弱に対して、年間の観光客数は約四十万人。そのほとんどが縄文杉などがある山岳部に集中するため、トイレがパンク状態。ルールやマナーを知らない観光客によって、杉が傷つけられるといった問題も起きている。

またラムサール条約湿地に登録された永田浜も、観光客の急増によってウミガメの産卵地が荒らされて、ふ化率が下がったりという問題が起きている。

「私は決してウミガメが好きじゃなわけじゃない」と屋久島うみがめ館代表の大牟田一美さん^{おおむたかずよし}。「だけど、ウミガメを守っていかないと、この素晴らしい砂浜を残せないんだ」と。

そこで出てくるのが「エコツーリズム」というキーワード。

「エコツーリズム」とは、自然・歴史・文化など、その土地特有の資源を生かした観光を成立させること。いわゆる「エコツアー」である。同時にそのために資源が損なわれないように保護し、地域経済の活性化もねらいとされている。

「島民の生活」「自然保護」「観光」、この三つの要素のバランスをとって、どれもがうまくいくようにするのが「エコツーリズム」なのである。

鹿児島県の屋久島環境文化財団・屋久島環境文化村センター副館長の川内誠さんによれば、同財団では「エコツアーガイドの育成も進めている」そうで、世界遺産登録当時十人ほどだった民間のエコガイドも現在は二百人近くに増えている。

私がエコツアーを初めて体験したのも、屋久島だった。三年前、初めて縄文杉に行った時のことである。もちろん今回も、取材と同時に森体験の時間はしっかり確保! エコツアーでは、森を歩きながら屋久島の情報や植物、動物の解説などガイドブックには書いてないようなリアルで最新の話を教えてもらえる。何よりも貴重なのは、自然とのつきあい方やルールを学べること。屋久島に来る観光客、みんな参加すればマナーもよくなるの! と思う。エコツアーは観光に、付加価値がつくのである。これは楽しさが二倍三倍になる。

「エコツーリズムには観光業だけでなく、一次産業を活気づけるきっかけになってほしい」と、町役場の塚田さん。屋久島は観光業は盛んなものの、農業や漁業の一次産業は衰退しており、後継者不足も深刻らしい。だが



◀太忠岳山頂に突き刺さる
巨大な岩。花崗岩の島・屋
久島には奇岩が多い



月に35日雨が降るといわれる屋久島。山あいを流れる川はどこまでも澄み切っている

この自然をこのまま後世に
とにかく屋久島のブランド力は大きい。世界的に注目
されているし、影響力もある。「エコツーリズム」がう
まく回って、さらに人、自然が両方生き生きとなるとい



人間のルーツは
森林にあるらしい

らエコツアーに農業、漁業体験を組み入れるようなく
みづくりも、これから行っていくそうだ。
屋久島観光協会ガイド部副会長を務め、ガイド歴
二十二年の眞津昭夫さんは、「縄文杉以外でも、もっと
いろんな素晴らしいところがある」と言う。実際、今回
も海岸線をぐるりと一周するなど、あちこち案内しても
らい、私自身、三回目なのに初めての場所も多く、初め
ての話もたくさん聞かせていただいた。縄文杉に集中す
る観光客を緩和し、自然環境への負荷軽減と快適な利用
環境創出のため、屋久島町は二〇一一年度から制限利用
調整も視野に入れているそうだ。



世界遺産登録地域・西部林道付近にはヤクシカ、ヤクザルが我が物顔で遊んで(?)いるし、ラムサール登録湿地の永田浜は夏にはウミガメが訪れ、産卵するという。また、たっぷりの水流が豪快に流れ落ちる、落差88mの大川(おおこ)の滝は、車を降りてほんの少し歩くだけで姿を現す。屋久島の多様な自然、生態系は、まさに次代に引き継ぐべき素晴らしいものだ。



上大岡トメ かみおおか とめ

1965年生まれ。東京理科大学卒。一級建築士。建築会社勤務後、イラストレーターに。現在、山口県在住で高校生と中学生の母。趣味はダンス、ヨガ、ピラティスなどカラダを動かすこと。著書は『キッパリ! たった5分間で自分を変える方法』(幻冬舎文庫)、『のうだま』(池谷裕二氏と共著 幻冬舎)、『トメさんちの愛犬マヤ』(飛鳥新社)など多数。最新刊は2回の屋久島ルポも収録された『島さんぽ』(ふくもの隊と共著 角川書店)。

トメカミカメト <http://www1.ocn.ne.jp/~tomesan/home.html>

いな、と心から思う。そして私たち島外から訪れる者だってルールやマナーを守って協力しなくてはいけない。この森をこのまま後世に残せるように。

さてと。屋久島に来て、私のエコに対するモチベーションは高まった。次は自分の住んでいるところの環境を、そこにあった方法で守らなくてはいけない。今の私にすぐできることは何だろうか?

帰りの飛行機の中で、屋久島の森を思い出しつつ、ぼんやりと考えていた。

躍